

ジュニアリーダーの意識と実態

～ジュニアリーダーの定例会に関する調査より

概要：子どもの手による子ども会の実現のために全国各地で養成されているジュニアリーダーの、養成後のあり方に着目し、調査研究を行う。

子ども会の指導者・育成者層が人材不足であると言われる中、子ども会、ジュニアリーダーと経験してきた者が子ども会の中で活動を続け、指導者・育成者となるような「総合子ども会システム」が必要不可欠である。研究結果を通して、同システム構築のための展望を示唆する。

1. 目的

子ども会のお兄さんお姉さんとして、各地でジュニアリーダーが活動している。その数は、平成11年度で53,548人となっている（全国子ども会連合会「2001年度版子ども会白書」2002年 pp.52）。

しかしながら、現在に至るまで、ジュニアリーダーは、養成に力点が置かれてきており、養成後のあり方や実態に焦点があてられることはほとんどなかったといえる。活動そのものに関する調査として、全国子ども会連合会「子ども会ジュニア・リーダーの意識と実態」1980年 や、全国子ども会連合会「子ども会ジュニア・リーダーの意識と実態」1989年 等が挙げられるのみである。

では、養成後のジュニアリーダーは、どのような活動を行い、その実態はどのようなものなのであろうか。養成にあたる子ども会の指導者・育成者は、養成後の姿を十分に把握しているだろうか。それは、前述のように、解き明かされていない部分が多いといえる。

ところで、ジュニアリーダーは、中高校生を中心に、子ども達が自らの手で運営しているところが多い。これは、地域の単位子ども会が目指すべき姿を、少し別の形で実践しているという見方ができるのではないだろうか。

だとすれば、養成後のジュニアリーダーがどのようなあり方をしているかを知ることが、子ども達の手による子ども会実践の手がかりを知ることにつながるのではないだろうか。

そこで、養成後のジュニアリーダーの活動や、あり方についての実態を調査し、その傾向を探っていく。また、特徴や課題を分析することで、今後の子ども会のあり方を考察することを目的とする。

2. 理論・仮説

ジュニアリーダーは、塾通いや部活等を抱えながら普段の生活を行っており、その取り巻く環境は、大変厳しいといわざるをえない。しかし、そのような中でも、ジュニアリーダーは意欲的に活動を行っている。

そうした彼らは、活動に関して多くの問題を抱えていると考えられる。これらを取り上げ、実態を知ることにより、

子ども達の手による子ども会運営に際して課題となることをあぶり出す。

ジュニアリーダーの養成は、研修等による養成と、養成後のフォローの両方が必須である。自主性を尊重するという理由で、養成後のクラブ運営には一切口を出さないとこもあるが、それは本当に正しいことなのだろうか。積極的に指導者・育成者がジュニアリーダーの活動に関わるところと比較し、実態を確認することにより、指導者・育成者のあり方を見つめなおす。

また、指導者・育成者不足が深刻化する中、高校を卒業した会員が、より積極的に担い手となることが望ましいと考えられる。そこで、ジュニアリーダーの活動にどのように関わっているのかを調査し、担い手となるための諸条件を明らかにする手がかりとする。

3. 実験・検証方法

ジュニアリーダーの定例会に関するアンケートを実施する。ジュニアリーダーズクラブの会員数や定例会の参加率、開催頻度、育成者の定例会への関わり、定例会に関して抱えている問題点等の実態を調査し、その結果や傾向を分析する。

1) 調査方法

筆者のホームページである「ジュニアリーダーコミュニティセンター(<http://jleader.s12.xrea.com/>)」において、「全国定例会アンケート」と題してアンケートを行う。

方法は、アンケートに協力しようとする者が、インターネットのアンケート投票用ページにアクセスして、設定されている項目に記入するという方式をとる。

インターネットを用いたアンケートは、他のアンケート方法に比して信憑性が低いものとされているため、項目にクラブ名、投稿者名及びメールアドレスを設定し、記入がない場合は集計から除外した。すなわち、無記名ではなく、記名アンケートの形をとった。

2) 調査対象

「ジュニアリーダーコミュニティセンター」訪問者で、ジュニアリーダーズクラブ、又はこれに類するものに所属している者（主として中学生から社会人）

3) 調査時期

2003年6月17日から同年7月17日まで

4) 調査内容

- クラブの会員数
- 参加率
- クラブのメンバー構成
- 育成者の関わり方
- 高校を卒業したメンバーの関わり方
- 頻度・日時・時間帯・会場
- 毎日集まれる場所の有無
- 平均的な日程

- 1回の定例会までの準備回数
- 定例会を主に進める人
- 定例会後の打ち上げ
- 抱えている問題点

5) 協力者の概要

総計で 30 名。そのうち、同一のクラブから複数の協力をいただいたところもあったので、クラブ数で換算すると 27 のクラブである。ブロック別では次の通り。

なお、複数の協力があった場合のアンケートの取り扱い、クラブのデータに関するものは、先に投票があったものをクラブのデータとした。それ以外のものに関しては、区別をつけずに集計を行った。

ブロック	クラブ数	ブロック	クラブ数
北海道	0	近畿	2
東北	2	中国四国	4
関東甲信越静	8	九州	5
東京	2	指定都市	2
東海北陸	2	計	27

4. 調査結果・考察

1) クラブの会員数

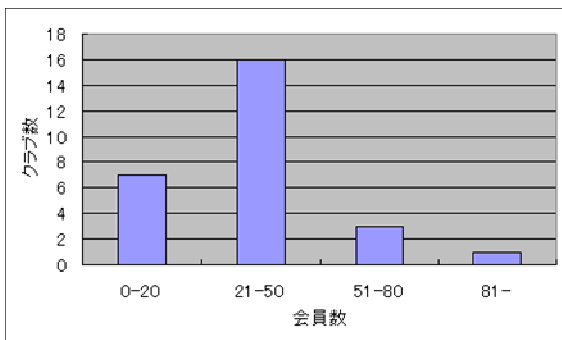
Q.会員数はどのくらいですか

選択肢：A.0～20人 B.21～50人 C.51～80人 D.81人以上

表1・クラブの会員数

会員数	クラブ数
A.0～20人	7
B.21～50人	16
C.51～80人	3
D.81人以上	1
計	27

図1・クラブの会員数



クラブの会員数を見ると、21～50人という中規模のクラブが突出して多く、次に0～20人の小規模なクラブが続いている。一方、50人を超える大規模なクラブは少数だ。

つまり、ジュニアリーダークラブは、50人以下で構成されている場合が多いということがわかる。

2) 定例会の参加率

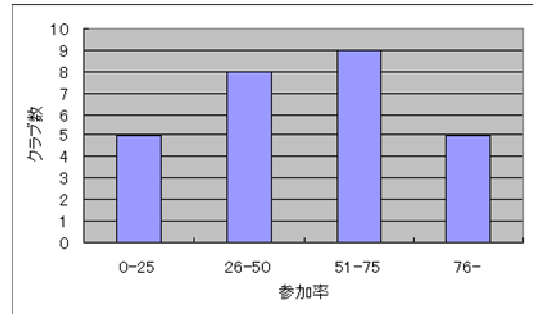
Q.定例会の参加率はどのくらいですか?

選択肢：A.0～25% B.26～50% C.51～75% D.76%以上

表2・定例会の参加率

参加率	クラブ数
A.0～25%	5
B.26～50%	8
C.51～75%	9
D.76%以上	5
計	27

図2・定例会の参加率



クラブによって諸事情があるので一概には言えないが、会員の定例会への参加率は、高いほうが望ましいのは明らかであろう。参加率が高いことは、会員のクラブの活動に参加する意欲が高いということだからだ。参加率が25%以下であれば、たまにしか出てこない会員が半数近くいたり、幽霊会員が大勢いたりするであろう。逆に、参加率76%以上というところは、ほとんどの会員が毎回参加していることになる。この先の報告では、参加率とそのデータの間を考察することが多くなるが、これは参加率がひとつの「パラメータ」になると考えているからである。

さて、結果を見てみる。定例会への参加率は、25%以下や、76%以上というクラブも少なくないが、50%前後に山があることからわかるように、平均すると、ジュニアリーダーの定例会の参加率は、50%くらいである。これは、かなり健闘している数字といえるだろう。

ジュニアリーダーは中学生や高校生が多いが、彼らを取り巻く状況は厳しいものがある。放課後や休日にも部活、塾等で毎日忙しい生活を送っており、それに加え、月数回であっても、継続的にジュニアリーダー活動に参加することは、非常に困難であるからだ。そんな状況で、ジュニアリーダークラブの定例会参加率の平均が約50%であることは、特筆すべきことではないだろうか。

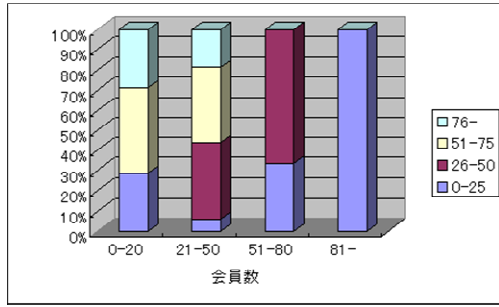
3) 会員数×参加率

では、会員数と参加率の関係を見てみたい。

表3・会員数×参加率

右会員数・下参加率	A.0-20人	B.21-50人	C.51-80人	D.81人以上	計
A.0-25%	2	1	1	1	5
B.26-50%	0	6	2	0	8
C.51-75%	3	6	0	0	9
D.76%以上	2	3	0	0	5
計	7	16	3	1	27

図3・会員数×参加率



会員数が少ない「0～20人」や「21～50人」では、参加率が高いことを示す「76%以上」や「51～75%」がかなりの割合となっているが、会員数が多くなると、それがすっきりなくなってしまう。つまり、会員数が少ないほど、参加率がよいということがわかる。

これは、会員数が大きくなると、全員に役割が与えられないことが多く、参加しても「自分がクラブの役に立っている」という実感がわきにくくなってしまふからだと考えられる。特に、ジュニアリーダークラブは中高校生を中心に運営されていることが多く、細かいところまで目が届きにくいという側面も内包しているからであろう。逆を言えば、会員数が少ないクラブでは、必然的に何らかの役割が与えられ、仲間意識もより強いものになっていると考えられる。

よって、クラブの会員数が増えてきた場合は、班を作る等、一人ひとりが参画し、役に立っていると思えるような工夫が必要になるといえるだろう。

4) 会員の構成

Q.メンバーの構成はどうなっていますか?

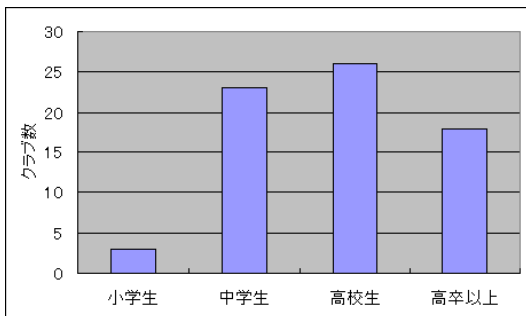
選択肢 : a.小学生 b.中学生 c.高校生 d.高卒～

(*あてはまるものをすべてチェックしてください)

表4・クラブの構成員

構成員	クラブ数
a.小学生	3
b.中学生	23
c.高校生	26
d.高卒～	18

図4・クラブの構成員



複数選択可のため、大きな数字になっている。

ジュニアリーダーは、中学生や高校生を中心に構成されていることがわかる。特に高校生は全クラブの96%にも達しており、ほぼすべてのジュニアリーダークラブの構成員

となっている。

また、約7割のクラブに、高校を卒業したメンバーが所属している。従来、高校を卒業したら引退というケースが多かっただけに、これも高い数字と言えるだろう。

逆に、ジュニアリーダーに小学生が構成員として所属するところは少数であることがわかる。

さて、この結果を、選択パターン別に分けてみた。

表5・クラブ員の構成パターン

構成パターン	クラブ数
小・中・高・卒	3
中・高	8
中・高・卒	12
高・卒	2
高	1
卒	1

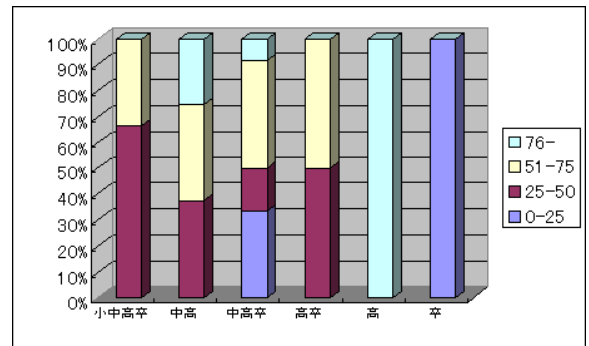
「中学生・高校生・高卒」のパターンが多く、次いで「中学生・高校生」となっている。このことから、中学生だけ、高校生だけのクラブは少数で、子ども会と同様、多くのクラブで異年齢集団を形成しているということがわかる。特に小学生が構成員となっているクラブは、すべてが「小学生・中学生・高校生・高卒」という、幅広い年齢層で構成されていることは注目すべきところだろう。

5) 会員の構成×参加率

表6・構成パターン×参加率

右参加率・下構成員	A. 0-25%	B. 26-50%	C. 51-75%	D. 76%以上	計
小・中・高・卒	0	2	1	0	3
中・高	0	3	3	2	8
中・高・卒	4	2	4	2	12
高・卒	0	1	1	0	2
高	0	0	0	1	1
卒	1	0	0	0	1
計	5	8	9	5	27

図5・構成の構成×参加率



参加率 51%以上の割合は、「小中高卒」「中高」「中高卒」「高卒」いずれもほとんど変わらない。つまり、どんなに年齢層が幅広くても、そのことが会員の参加意欲に直接関係することはないということがいえる。

6) 会員の構成×会員数

表7・構成パターン×会員数

右会員数・下構成員	A.0-20人	B.21-50人	C.51-80人	D.81%以上	計
小・中・高・卒	0	2	1	0	3
中・高	1	6	1	0	8
中・高・卒	3	7	1	1	12
高・卒	1	1	0	0	2
高	1	0	0	0	1
卒	1	0	0	0	1
計	7	16	3	1	27

図6・構成パターン×会員数

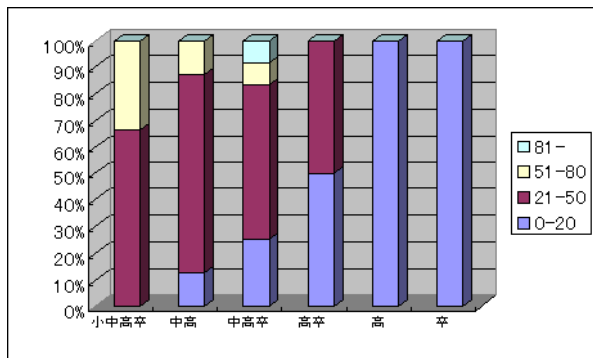


図6から、年齢層が幅広いほど、会員数が多い傾向があることがわかる。

5)、6)の結果からわかることは、会員数が多くても、年齢層が幅広い場合、そのことが参加率に影響を与えることは少ないということである。このことは、異年齢集団の優位性を裏付ける結果が出たといえるだろう。

7) 定例会に関して抱えている問題点

Q.定例会に関して抱えている問題点はありますか? (*あれば記入)

※見やすくするため、多い順にグルーピングを行った。

表8・定例会に関して抱えている問題点

分類	回答
0内は回答数	
参加者が少ない(9)	幽霊部員がいる
	公民館からのはがきを使って毎回の案内をするので、通信費がかさむ。それなのに、あまり集まらない
	現在会員数が少ない上に、定例会参加人数が5~6名なため、クラブ全体に関わるなどが決定できない
	出席率!!
	参加率が悪い(今年は特に高校3年生が多いため、仕方ないですが...)
	人が行事前しか集まらない
	毎回集まるメンバーが一緒。
	毎回決まって来ない人がいる。
	参加人数が少なめ。
私語が多い(6)	自分に関係のない話だと私語をする
	堅い話を聞くことができない(討論会ができない)
	会員が話を聞かない...
	いらんおしゃべりが多いかなあ...

集中力がない(5)	前で人が進めていても話を聞かない。
	雑談になってしまう。話し合いの最中に脱線してしまう。
	プリクラ交換や携帯でメールを打っている。
	なかなか話し合いが進まない
	集中していない
後輩が育たない(4)	高校生(会長)が定例会に参加できないとき、頼る人がいない
	中学生の態度。うるさい。間延びしてしまいます。
	中学生の話を聞く態度が注意しても直らない
	中学生が部活でこれず、なかなか成長しない
無断欠席(3)	欠席の場合会長に連絡するはずが、無断欠席が多い
	遅刻、欠席の連絡が出来ていない。
	欠席の連絡がなかなか来ない。
意見を出さない(3)	意見発表してくれる人が限られている
	毎回意見を言う人が決まっており、ただ参加しているだけという人が多い。
	意見を出さない人が多い
時間が守れない(2)	13:00~は始めるのに、13:00 前後ギリギリの集合であること
	遅刻かな?「来ます!」って言ったやつが来ない!
日時の悩み(2)	社会人が多いので、夜間にしか定例会が開催できないこと(日曜は活動も多いので難しい)
	計画をするのはとても楽しいのですが、スタッフにも学校があるので、目標は月1回の定例会がなかなかできません
連絡回らない(2)	連絡網が機能を果たしていない...
	お知らせのはがきがあるにもかかわらず、日時の問い合わせがある
合計	36

次に、定例会に関して抱えている問題点を、ざっくりばらんにあげてもらった。表8を見てみると、定例会を行っていく中で、問題だと意識していることが相当数あることがわかった。しかし、それらは決して多岐にわたるものではなく、むしろ各クラブで共通している事柄が多いようだ。

○定例会の「入り口」の問題

参加者が少ない、無断欠席が多い、連絡が回らない。

○会が始まってからの問題

集中力がない、私語が多い、意見を出さない、後輩へのいらだち。

一方で、「問題なし」と答えるクラブも多く存在した。

挙げられた問題点を解決するには、ジュニアリーダー自身の努力が必要だが、その糸口を示唆するアドバイザーとして、指導者・育成者や高校を卒業した会員の存在が重要

なのではないだろうか。そこで、育成者の関わり方について調査してみた。

8) 育成者の関わり方

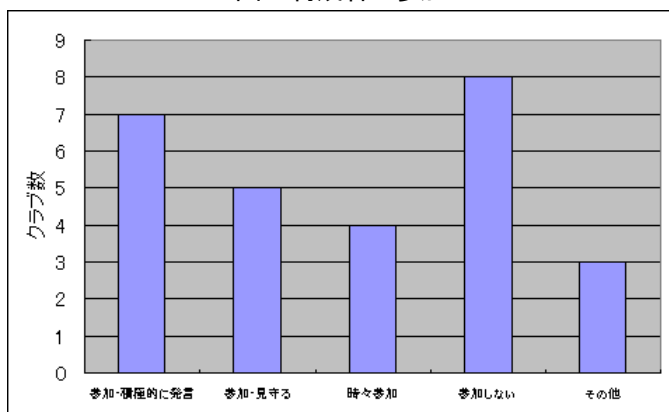
Q.子ども会の育成者は定例会に参加しますか?

選択肢：a.毎回必ず定例会に参加し、積極的に意見を出す b.毎回必ず来るが、見守るだけ c.時々定例会に来るが、毎回ではない d.まったく参加しない e.その他

表9・育成者の関わり方

育成者の関わり方	クラブ数
a.毎回必ず定例会に参加し、積極的に意見を出す	7
b.毎回必ず来るが、見守るだけ	5
c.時々定例会に来るが、毎回ではない	4
d.まったく参加しない	8
e.その他 ・ジュニア育成会の人とは毎回誰か来る ・独立行政法人のため育成者とは無関係 ・JLの担当者のみ参加	3
計	27

図7・育成者の参加



次に、子ども会の「育成者」の方々が、ジュニアリーダークラブにどのように関わっているかを聞いてみた。指導者と育成者の違いがまだ認知されていないため、「育成者」とひとくくりにして設問したのである。表9によると、a. b. c.をあわせ、全体の3分の2のクラブでは、何らかの形で育成者が定例会に参加していることがわかる。特に、25%のクラブでは、毎回育成者が定例会に参加し、積極的に発言を行っている。一方で、約3割のクラブでは、育成者が定例会に全く参加していないということもわかる。

9) 育成者の関わり方×参加率

では、育成者の定例会への関わり方と参加率の関係はどのようなになっているのだろうか。

表10・育成者の関わり方×参加率

右参加率・下育成者の関わり方	A. 0-25%	B. 26-50%	C. 51-75%	D. 76%-	計
a.毎回必ず定例会に参加し、積極的に意見を出す	0	1	3	3	7
b.毎回必ず来るが、見守るだけ	0	1	3	1	5
c.時々定例会に来るが、毎回ではない	1	1	2	0	4
d.まったく参加しない	4	2	1	1	8
e.その他	0	3	0	0	3
計	5	8	9	5	27

図8・育成者の関わり方×参加率

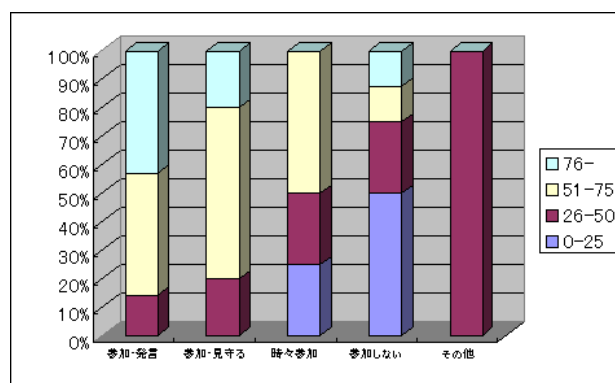


図8にはっきりと結果が表れた。育成者の定例会への関わり度合いが大きいほど、会員の参加率が高いことがわかる。

よく、育成者が定例会に参加しない理由として、「ジュニアリーダーの自主性を尊重するため。」というものが挙げられる。だが、少なくとも、会員の参加意欲に関しては、育成者が、より多く定例会に関わりを持ったほうが高くなるということなのだ。この背景には、育成者が顔を出すことで、ジュニアリーダーと育成者の信頼関係が出来やすくなること、ジュニアリーダー自身では目が行き届かないところにも育成者は目が届きやすいこと、何か問題が起きたときに助言を得やすいこと等により、が挙げられる。

他方、一番割合が大きかった「育成者はまったく参加しない」クラブは、参加率の高いクラブが見られる一方、参加率の低いクラブも突出して多いことがわかる。これは、育成者の助けを借りられないことから、より自主的な運営がなされる反面、これがうまくいかない場合、クラブ員の意欲低下に歯止めがかけられないということであろう。

すなわち、7)で指摘したように、アドバイザーとしての指導者・育成者の存在が必要であるといえる。

9) 高校を卒業した会員の関わり方

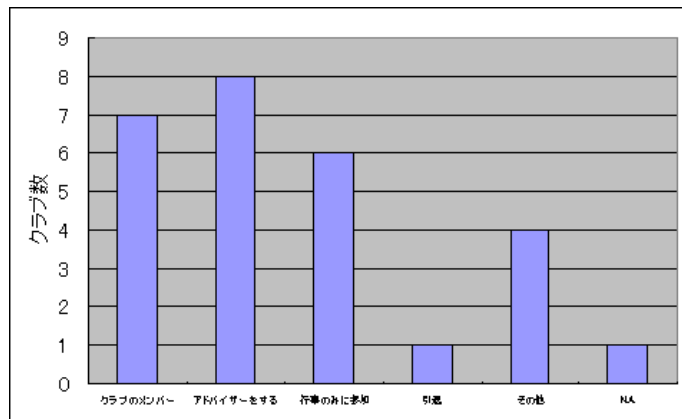
Q.高校卒業のメンバーはどうしますか?

選択肢：a.中学生・高校生と同じようにメンバーとして活動 b.定例会に参加するが、シニア(OB)のアドバイザー的役割 c.定例会に参加しないが、行事などには顔を出す d.引退して、まったく関わりがなくなる e.その他

表 11・高校を卒業した会員の関わり方

高校卒業メンバーの関わり方	クラブ数
a.中学生・高校生と同じようにメンバーとして活動	7
b.定例会に参加するが、シニア(OB)のアドバイザー的役割	8
c.定例会に参加しないが、行事などには顔を出す	6
d.引退して、まったく関わりがなくなる	1
e.その他 ・育成会に入会する ・時たま連絡はとる ・人それぞれ	4
NA.	1
計	27

図 9・高校を卒業した会員の関わり方



次に、高校を卒業した会員（以下「高卒層」という。）のクラブへの関わり方を聞いてみた。北海道等地域によって呼称は違うが、一般に「ジュニアリーダー」とは中学生や高校生のことを指し、それ以上の年齢と区別するからである。

図 9 によると、現状の高卒層のクラブへの関わり方は、クラブによってかなり異なるということがわかる。「引退してまったく関わりがなくなる」と答えたところは、ほとんどなかったが、そのままメンバーとして活動を続けるところもあれば、行事に顔を出す程度のところも見受けられる。「その他」への記述も多く、子ども会の育成会に入会するところや、人それぞれにしているところもあった。

このことは、高卒層の呼称が、「シニアリーダー」「青年リーダー」「ユースリーダー」「OB (OG)」「集団指導者」等様々であることと無縁ではないだろう。つまり、高卒層の位置づけがあいまいなのである。

5. 結論

昨今の中高校生を取り巻く状況、子ども会が「大人会」化してしまっている現状がある中で、この調査の結果から見えてきたジュニアリーダーの活動やあり方は、活発なものであるとの評価を与えても、差し支えないだろう。中高生を中心としたジュニアリーダー自身の手によって活動が行われており、しかも幅広い年齢層により構成されていることが見えてきた。すなわち、「異年齢集団・ジュニアリーダーの手によるジュニアリーダークラブ」が実践され、しかも、会員は、その活動に確実に足を向けているのであ

る。これは、「子どもの手による子ども会」が実現可能であり、ジュニアリーダーはそのモデルになりうるということを示していると言えるであろう。

また、ジュニアリーダーは、活動の運営に関して多くの問題を抱えているが、それらを解決するには、ジュニアリーダー自身の努力だけでなく、熱心なアドバイザーの存在が必要不可欠である。このことは、育成者の関わり方が熱心なほど参加率が良いという結果に現れていることから明らかであろう。

しかしながら、昨今、東奥日報「子ども会の「合併」進む」2004年12月29日 等でも取り上げられているように、子ども会指導者・育成者層の人材不足が深刻化している。これを解消するために必要なことは、高卒層の位置づけを明確化し、子ども会の指導者・育成者へと続くような、「総合子ども会システム」を構築していくことではないだろうか。なぜならば、取り巻く環境が厳しい中、定例会参加率 50%という高い意欲で子ども会活動に取り組んできた者達だからである。

だが、高卒層の位置づけは、現在に至るまで、非常にあいまいであるといわざるを得ない。

このことを踏まえ、今後は、高卒層の現状をさらに精査し、「総合子ども会システム」を実現するために何が必要なのかを、深く研究していく必要があるといえよう。

5. 参考文献等

(調査結果)

- ・拙著「子ども会ジュニアリーダーの定例会に関する調査」ジュニアリーダーコミュニティセンター 2003年 (<http://jleader.s12.xrea.com>)

※この調査に関して、本稿で取り上げたもの以外を含めた調査集計結果と概要が閲覧できる。

(参考文献)

- ・全国子ども会連合会「子ども会ジュニア・リーダーの意識と実態」1980年
- ・全国子ども会連合会「2001年度版子ども会白書」2002年
- (参考 URL)
- ・青年リーダーNET <http://youthnet.seesaa.net/>